筑波大学臨床医学系講師
植 野 咲

超音波医学における世界的な巨匠、福田守道教授と David Cosgrove 教授による共著「Abdominal Ultrasound――A Basic Textbook」は、1994年7月に筑波で第7回世界超音波医学学会連合大会 (WFUMB: World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology) を主催し、大成功を収めた。Cosgrove教授は放射線科医であり、超音波の原理に精通し、卓越した臨床能力を持つ。最近では、カルドプラにおける更に業績が認められ、Hammersmith HospitalのRoyal Postgraduate Medical School教授として迎えられた。彼は、婦人科、泌尿器の領域も含めて腹部臓器全般に超音波を研究し、そのカバーする範囲は福田教授同様に広い。しかしながら、個人で腹部臓器すべての超音波診断学を網羅することは到底不可能であろう。この本は、両教授の知識と技術を補完しながら、また、い ろんな研究者の好意により珍しい症例の提供を受けて、総合的な教科書として完成されている。

英文も簡潔、明瞭である。Cosgrove教授は英国においても文章表現のうまい医学研究者と言われており、英国内での論文は優秀である。本著は、日本あるいは国際性をも意識させたもので、American Englishのスタイルを取り、比較的平易な表現となっている。解読者でも脇肘はらずに深く読むのが通っている。用語もスタンダードとなっており、英文でリポートを記載する際には大いに参考になるであろう。

授業時間の削減により、学生が超音波の基礎を系統的に学ぶ講義がないようになった。超音波診断装置の急速な発展により、解像度の良い透明な断層像が得られるようになり、解剖学的な知識のみでそこでの診断を下せるようになった。ここに大きな落とし穴がある。超音波は非侵襲的な診断技術で、最大の特徴があるが、アーチファクトが多いのもこの診断法の特徴である。この理解なしに超音波診断を下すには大きな危険性を孕んでいる。私自身も感じ出しのところ、ミラーイメージを知らず、気管内に腫瘍があると判定し、正常な気管の内視鏡検査をせずに屍検が行われることがある。本著では Diagnostic Problems in Ultrasound の項でこれらの pit fall を簡潔にまとめてあり、非常によくならない。基礎的な講義を受ける機会のなかった学生、レジデントの自ら時間を作り、超音波検査での Golden Rule をぜひ会得していただきたい。精緻なイラストも添えられており、特に脾臓、肺臓の項ではイラストのコントラストがよく、わかりやすい。経験が少ない読者にも理解が得られるであろう。

通常の参考書では basicなパートは英文で読むと途中で挫折しやすい。ところが、本書は隙々に読みとせるスパイシーが振り掛けられており、タイタニックの事件が超音波の発展を加速させた、SONARの語源、二人のDussikの関係、電子式のリアルタイムを発明したBomはNATO出身だったなど、ちょっとした興味を誘う、読み出したら、やめられない著書である。

B5 頁376 図410 写真421 表11 1997 定価(本体17,500円+税) 〒400

医学書院刊(☎03-3817-5657)

1998年2月